

ふなから



目次

同窓会会長挨拶…………… 2

学部長挨拶…………… 3

同窓会総会・特別講演…………… 4

特別寄稿（辰野高司先生）…………… 6

研究室紹介…………… 8

退職によせて

上野芳夫先生（毒性学・微生物化学研究室）… 9

田中信壽先生（植物薬品化学研究室）… 10

実践社会薬学講座…………… 12

会計報告…………… 13

大学の現状（在校生・進路）…………… 13

同窓会役員名簿・幹事連絡先…………… 15

シールの確認を…………… 15

「歩こう会」のご案内…………… 16

同窓会会長挨拶

東京理科大学薬学部同窓会会長 小原 侃

同窓会会員の皆様こんにちは。巷では明るく心踊るようなニュースは、希にもなかなかお目にかかれない、暗い世相の昨今ですが、このような時こそ同窓会員間の交流を通じた相互扶助が求められているのかも知れません。

現在の社会の混乱は長年に亘り、「まあ、いいや」、「仕方ないや」で大切な問題を先送りにし、社会の狂った歯車のベルトを止められずに来た結果が生み出したものではないでしょうか。識者によれば、その結果が現代社会の構造的システム破壊とモラルハザードの欠落につながり、その張本人である政治家、政府、行政はもとより、投票しない有権者として社会への最低限の責任を放棄した一部の我々一般市民をも含め、総無責任化したツケが、今、我々の周辺や個々のレベルにまで直接的に影響を及ぼしてきているのだそうである。もしそうであれば、これを復元するためにはそれ相応のエンタルピーが必要で、現在我々の直面している様々な困難が克服されるまでには、相当の時間とエネルギーを要するものと覚悟せざるを得ないでしょう。

だからと言って、今、大上段に構えて社会全体の問題解決を唱えてみても、政策決定にあたり「指令塔はどこだ」などと騒いだ政党がつい最近にもあったほどに Social Cognition (社会認識能力) の欠如した現代社会では、市民レベルの問題点を具体的に解決するための特効薬は容易には発見できないかもしれない。今は、じっくりと内視鏡でここに至った原因を探り、望遠鏡で将来を見据え、双眼鏡で周囲を少し手前から確認しながら、不透明な路を少しばかりの勇気を持って、地道に、明るくトテチテターと歩き続けることが必要なかもしれません。そのような時に、たまには同窓との交歓で溜飲を下げるのも、万華鏡までは手に入らなくても、「時薬（ときぐすり）」の効用を助けるくらいの効きめはあるかも知れませんし、また、思わぬ知恵も出てくるかも知れません。そこで、同窓会が少しでもそのような同窓交歓の場の醸成に役立てばと願っております。

因みに、「まあ、いいや」、「仕方ないや」はそれぞれドイツ語では「egal」及び「Kann Mann nichts machen」と言い、古くからの衆愚時代の世界の共通意識であることが伺われます。社会学者のいう社会輪廻（独裁、貴族、民主、衆愚）では、現在は衆愚時代スパイラルの入口にあり、健全な民主の時代から足が離れかけているように思います。その危険な時期が長期化するとDecadenceの気がみなぎり、突如、強力なリーダーシップをもった人間が集団を率いて現れ、時代を独裁の方向に向かわせると言われています。そうなるからでは遅いでしょう。衆愚の甘い香りに後ろ髪をひかれながらも、一人ひとりが、もう少し社会に対する責任分担を覚悟するべき時ではないでしょうか。



学部長挨拶

薬学部同窓会 同窓生への期待

薬学部長 中村 洋

平成8年10月から星野修教授の後を受けて学部長を務めておりましたところ、この夏に再選され、今年の10月からさらに2年間学部長を務めさせて戴くことになりました。引続き御指示・御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。薬学部同窓会の皆様には、ほぼ1年前に初めてこの紙面をお借りしてご挨拶をさせていただきましたので、薬学部に関わるその後の話題の幾つかを順を追ってご紹介致します。

4月25日(土)、第2回薬学部運動会を久喜キャンパスで行いました。教職員・院生・学生、合わせて約700人が集まり、競技終了後の懇親会も大いに盛り上がりました。西川哲治学長からは参加賞(タオル)、保健体育科学センターからは賞牌代を毎年援助して戴いており、今回は薬学部同窓会からもご援助を戴きました。この場をお借りして御礼申し上げます。バレーボール、ドッジボール、リレーなどで得点を競う研究室・クラス対抗は、前回は私のおります分析化学研究室が総合優勝の栄に輝きましたが、今回は情報薬学関係研究室の躍進が目ざましく、分析化学研究室と同点で総合優勝を分け合いました。第3回の運動会は来年4月24日(土)に同じく久喜キャンパスで開催の予定です。同窓生の方々も是非ご参加下さり、骨休めして戴ければ幸いです。

6月11日(木)、文部省の視学委員2名が事務官1名を伴って薬学部の状況を調査するために来学されました。理事長、学長を含む、法人・大学を挙げての説明と実地調査に加え、大学生・院生(修士)へのヒアリングがありました。ヒアリングは、薬学部では本学が最初のケースであり、本学としても経験のないことでした。各学年から1名ずつ集めた6名の学生・院生から、生の声を直接聞こうという趣旨です。視学委員は、このヒアリングに最も興味があったようで、予定の時間(60分)を超えて色々尋ねられたよ

うです。お蔭で、学生の方は緊張していた勢か、気の毒にも相当消耗した顔つきになっていました。しかし、最後の講評では、こちらが予想していたネガティブな点を指摘されはしましたが、概ね好意的なご意見を戴きました。中でも、卒論生全員がポスターボードで卒業研究を発表する合同卒論発表会は、視学委員も『薬学部では聞いたことがない』試みだそうで、高い評価を戴きました。

7月4日(土)、10時から第1回薬学特別講演会を開催し、辰野高司先生に「薬学の哲学」と題して90分間、百数十名の教員・院生・学生・卒業生にみっちり講義をして戴きました。先生は薬学や薬剤師の誕生に纏わる歴史に触れた後、薬剤師の使命と今後の在り方を熟っぽく説かれました。碩学の警咳に接し、一同薬剤師の任務の重さを改めて認識し、大きな感銘を受けました。

11月22日(日)、理大祭50周年を記念して、首都圏に住む3年生を対象に父母懇談会が初めて開けられました。5号館5階の体育館に神楽坂地区の昼間学部(理・薬・工)の父兄442名が参集し、学長挨拶、学生生活・就職説明を受けた後、各学部ごとに懇談が行われました。薬学部では対象となる学生が56名であるに対し、78名もの多数のご父母が参加して下さいました。学生の成績をお渡しした後、教員が手分けして個別面談を行いました。『うちの子は4年に進級できるか』、『大学院に行かせた方が良いか』、『病院薬剤師になりたいと言っているが、行けるのか』、『将来は大丈夫か』、などが代表的な質問でした。これまで、首都圏出身の学生については父母懇談会を開いておりませんでした。今回参加された方々の熱気に触れ、来年以降も薬学部だけでも行うべきではないか、と強く感じた次第です。

なお、来年のことになりますが、ご定年を迎

えられる久保寺昭子教授の最終講義が3月13日(土)10時30分から10号館1011教室で予定されています。講義終了後には、12時から10号館食堂で学部主催の記念パーティーもございまして、お誘い合わせの上ご参加下さるようお願い致します。

以上、この一年間の薬学部関係の出来事をかい摘んでご紹介致しました。本年6月30日、大学審議会は「21世紀の大学像と今後の改革方策について」と題する中間まとめを文部大臣に答

申しましたが、「競争的環境の中で個性が輝く大学」という副題がついております。薬学部を取り巻く厳しい環境の中、理科大薬学部が次世紀に向けて一段と飛躍するには、同窓生の皆様のご支援とご協力が不可欠です。機関誌「ふなかわら」の紙面から皆様のお力添えをお願いする次第です。どうか、忌憚のないご意見やアドバイスをお寄せ下さるよう、お願い申し上げます。

Fax No. 03-3260-4941 : e-mail; nakamura@ps.kagu.sut.ac.jp

(平成10年12月5日 記)

同窓会総会 特別講演

「大衆は薬剤師に何を期待しているか」

ーブラウン管を通じて感じた薬剤師の使命ー

東医食治研究会会長 田村 哲彦

一般消費者が求める薬剤師像

主婦が三人寄れば健康談議に花が咲き、「骨粗しょう症の予防には運動しなきゃだめよ」「ビタミンDと一緒にカルシウムを摂らなきゃ」「納豆に含まれるビタミンK」がいいみたいよ」などと健康情報が行き来している。これらは健康に対する関心の高さを示す現象の一つであろう。ここ数年、健康に関するテレビ番組の増加は目を見張るものがある。健康番組の元祖といわれる『午後は〇〇おもいきりテレビ』は、11～15%の視聴率を得ている。これらは健康に対する関心の高さを示す現象の一つであろう。

しかしこれらの健康情報は断片的であり、関連性や統合性を無視した形で流布しているのが現状である。そこに危険な要素を孕んでいることは否めない。

筆者はその責任の一端を担っている者として、体系的な健康情報を伝える必要性を強く感じている(マスコミは統合性のある情報の提供はしてくれないのが現状である)。これは一般消費者も感じているところであるが、医師に尋ねればきつと怒られてしまうと、なかなか質問できない現状である。身体に対して豊富な知識を持ち、

気軽に相談に乗ってくれる専門職といえば、薬剤師がいる。そのような気持ちで健康に関するいろいろな問題を我々薬剤師に持ち込んでくるのである。薬剤師は薬の専門家であり、薬を専門にしているのであれば身体に関する専門知識も豊富に持ち合わせているに違いないといった思考によるものであろう。病院薬剤師の病棟活動において、患者さんから尋ねられる事柄のうち、薬剤に関するものに次いで健康食品や健康法についての質問が多いのもその現れである。ここに一般消費者の抱く薬剤師像の一端が見えてくるのである。

医師が望む薬剤師

医師の専門誌である『医事新報』を開くと、毎号のように医薬分業に対して不満の声が収載されている。その論点は、薬剤師は信用できないといったところに集約できる。患者が経済的に負担増になる点をつく話であっても、服薬指導の利点を過小評価するものであり、その根底には患者を診ることもできない薬剤師に何ができるかといった疑念が存在している。

弘前大学病院薬剤部が行なった同病院の勤務

医に対するアンケート調査によれば、医師から見
て薬剤師が行ってほしくないと考える行為とし
て、処方箋から類推した病名を患者に伝える
(89%)、処方の内容に関して批判めいたことを患
者に漏らす(85%)、適応外の使用医薬品につい
て確認せずに適応のある病名に基づいた情報を提
供する(70%)、副作用を強調し過ぎる(67%)、
患者の実情に合わない画一的な情報を提供する
(60%)などが上がっている。さらに医師の治療
方針を理解した上で、医師の行なう患者指導と食
い違わない情報提供を行なってほしい旨の考え方
も示されている。これら医師の考える問題点を払
拭するために、医師側とのコミュニケーションを
密にし、さらに患者に提供する情報の事前協議を
重ねることが必要であることも明らかにされてい
る。

しかし問題解決の道筋は、そう簡単なものでは
ない。筆者には、もっと深いところに根ざしてい
る問題があるように思えてならない。それは薬剤
師が医療・健康のスペシャリストであるための医
学に関する知識量、そして医療従事者としての資
質に関するものである。足らざるを知り、不足を
補うべく精進を欠かすこと勿れである。

薬剤師の職能

医療法の改正により薬剤師は医療の担い手とし
て、正式に医療システムの中に組み込まれた。も
ちろん薬剤師のステータスは上昇した訳である
が、そのため病氣治療という側面が強調され過ぎ
、市井のなかにあって何でも相談できる身近な存在
であったはずの薬局(薬剤師)が遠くへ行ってし
まった感が拭い切れない。

薬剤師法の第一章、第一条にある薬剤師の任務
に関する条文には「薬剤師は、調剤、医薬品の供
給その他薬事衛生を司ることによって、公衆衛生
の向上及び増進に寄与し、もって国民の健康な生
活を確保するものとする」とあり、国民の健康な
生活を確保するための幅広い職能が要求されてい
る。

筆者は常々薬剤師が職能を発揮する場である薬
局は、調剤業務のほか次のような機能を合わせ持
っていなければならないと考えている。①医療の
水先案内人として最良の医療を受ける機会を提供
する。②プライマリーケアとセルフメディケー
ションを手助けするために最適な医薬品と情報の

提供を行なう。③心のケアセンターとして何で
も相談に応じる。④健康情報発信基地として、氾
濫する健康情報の整理や最新情報を個々に対応し
た形で発信する。そのために薬剤師は、医療人と
して人を見る目を養い、正確な医療知識を身につ
ける必要がある。さらに病氣は決して医師や薬が
治すものではなく、病人自身が治すものである、
というポリシーを持ち続けなければならない。
我々の身体には本来、自己防衛能力と自然治癒力
が備わっており、それらが十分に発揮されるよう
、精神的な安らぎや最適な生活習慣、そして正確な
医療知識を身につけられるよう詳細な指導を行な
う場こそが薬局であると考ええる。薬剤師は、ジェ
ネラリストとしての側面も要求されるのである。

病薬(専門医-開局薬剤師)連携

最後に、薬剤師が発揮できる専門性について筆
者の経験した一例を紹介したい。それは、東京歯
科大学市川総合病院泌尿器科、同産婦人科と共同
で行なった、病薬連携による男性不妊の漢方治療
の経験であり、現在も継続している。

生殖年齢にある夫婦の約10%は不妊で悩んでい
る。さらに不妊を主訴とした受診例の約40%は男
性由来の不妊であり、その90%は造精機能障害に
よる精液所見不良である。本疾患ではほとんどの
場合、精液所見不良以外に現病歴はなく、西洋医
学的に原因が特定される例はむしろ少数である。
これまで男性不妊に対して種々の薬物療法が試さ
れてきたが、有効例は少なく治療に苦慮してい
るのが現状である。そこで精液所見不良を主訴とす
る33例に弁証論治を試みた。専門医が西洋医学的
診断・検査を行った後、演者が四診・弁証を行い、
両者が協議して処方を決定了。少なくとも6ヵ
月間投与を行った結果、6例が妊娠(妊孕率
18.2%)し、全例が生児を得た。この結果は、原
因不明疾患である造精機能障害に対して漢方によ
る弁証論治療が有用であることを示唆している
が、特記すべきは開局薬剤師が専門医に対して診
断・処方支援を行った点であり、医師、薬剤師、
研究者が互いの専門知識を組み合わせることによ
り、より高度な治療成果を得られることが示さ
れたことである。今後はさらに医師の信頼に応え
られる専門知識の集積を図り、症例を重ねて行き
たいと思っている次第である。



特別寄稿

『薬学の哲学』

辰野 高司

私はこの30年間、東京理科大学で『薬学概論』の講義を担当してきた。そこでは常に沢瀉久敬先生が医学概論について述べられている、『一つの学問が成立するからには、当然そこには、その学問の根底をなす原理があり、その原理そのものを論じ、追求する哲学、言い換えれば「薬学とはいかなる学問であるべきかを内省する学問があるべきである。』とするお考えを、そのまま薬学にも当てはめて、薬学概論に対する考え方としてきた。

私は薬学研究の第一歩を合成化学研究という分野から歩み始め、その後微生物・中毒学の分野に転身し、またフランス留学でつぶさにフランスの薬学教育改革の現状や、150年前に始められた『臨床薬学教育』の歴史を学ぶことが出来たことで、『臨床薬学は如何に在るべきか』を考えるようになった。東京理科大学薬学部での講義では、私が『薬学概論』を考えてきた道程に沿ってお話をしてきた。しかし、この報告を書くにあたり、紙面の制約もあるので、ここでは150年前にフランスで誕生した『臨床薬学』が如何なるものであり、その後の発展の軌跡を追跡しながら、『臨床薬学』についてその在るべき姿を探るという点に絞って考察することにした。

我々が学んでいる薬学は明治の時代に『西洋の薬学』と『薬事制度』を導入したところから始まっている。その意味でヨーロッパの中心であったフランスの薬学の歴史を知るとは、我々が西洋の薬学を導入する以前の薬学の姿・歴史を知ることになると考えた。

フラオウ（パリ大学薬学部・薬学史・薬事法規担当教授）が纏めたフランスの薬学の歴史が極めて簡潔で理解し易いので、その諸説を要約する。

彼はフランスの薬学が経験した三つの革命を上げている。第1の革命はヒポクラテスによって打ち立てられたもので、疾病は神のなせる技ではなく、生物学的な反応であること。それによって観

察医学を確立し、自然治癒力を補うものとして医薬品を整理した（この観念がフランスに定着するのに2000年を要した）。第2の革命は錬金術の導入・発展によって化学的生成物を多数手に入れ、化学的技術を獲得した多数の技術者を生み出し、調剤を基にした『薬学』を『医学』と同等な崇高な学問としたアラビアの医・薬学の進歩であるとした（このことがフランスに定着するのに数世紀を要した）。第3の革命は医薬品の工業生産の出発（150年前）であると言っている。

11世紀にアラビアの医・薬学がヨーロッパに逆流し、この流れの受皿になった調剤師同業組合の親方による徹底的な錬金術教育によって、ヨーロッパにも化学的技術を持った職能集団が成立した。このことが医薬分業を推進するという結果を生みだし、一方では化学的技術を駆使して医療に供されていた生薬類から『生物活性を持つ本体』が純粹に取り出されるようになり、薬剤師教育を受けた薬剤師は近代化学の基礎を築き、その担い手になった。また、そのことは、実験生理学、実験薬理学を生み、ルネッサンス以来医学を進歩させた解剖学、顕微鏡学、細菌学等と結びついて、近代医学の発祥を用意した。

しかし、フラオウはこの第3の革命がヨーロッパで起こった、ほぼ同じ時代にフランスで起こった『臨床薬学』（病院薬剤師の組織的養成）の発祥については触れていない。しかし、このことはフランスの薬史学者が気がついていないにしても、極めて重要なことである。

ローマが崩壊した後、ギリシア・ローマの古典医学はキリスト教会を避難場所として温存され、ヨーロッパでは市井の医師や薬種商（ピグメンタリウス……後の調剤師）と同等の技術的能力をもった僧医、調剤僧および修道女達によって修道院での医療が行われ、その伝統はホスピスという形で近代化学が芽生えた18世紀まで続いた。

フランス革命によって旧体制が崩壊し、カトリック教団支配、医師および調剤師…薬剤師…のギルド支配が崩壊し、新しい意識を持った外科医、内科医が誕生し、化学者として成長した薬剤師との協同が始まった。例えばフルクロアによって創設された『健康学校』では内科、外科、薬学が同じ学校で教育された。このことによって、近代医学と臨床医学・薬学が誕生した。医師は『疾病の実態』の追究を行い、一方薬物の『純粋にされた実態』（たとえばモルヒネ、キニーネ、純粋に合成された薬物等）を把握した薬学』と結びついて、科学的根拠をもった、言わば『疾病と対応する薬物療法』という近代治療学の新しいパラダイムが成立した。この時代にアンテルヌ（インターン生…現在のインターンとは違い、病院内薬剤師の意味で、薬学校を卒業した者から優秀な者を選抜して、臨床実務と当時科学の中で最も進んでいた化学の徹底的教育をおこなった）を養成し、診断と治療の科学的遂行を目指した。

1960年代にアメリカで臨床薬学が模索された時に、フランスでの臨床薬学が見なおされ、更に『患者指向の薬学』が目指された。そしてアメリカで最も進歩した情報学を取り入れた『臨床薬学』が誕生、発展しつつある。もし、この段階で、真の『患者指向の情報』が与えられるならば、『新しい臨床医・薬学のパラダイム』への転換が起り得たであろう。しかし、残念ながら現在真の『患者個人を指向する医薬情報』は提供されていない。その理由は『医薬品の創製の考え方』と『医薬品を患者へ適用する考え方』の間に、埋めることの出来ない乖離があるからである。その問題はどこにあるのかを知らねばならない。

『医薬品創製の手順の中でのキーポイント』を探ってみよう。非臨床試験の目的は『薬の候補者』として選出された化合物の『生物活性』と『安全性』を可能な限り『バラツキの少ない』、『科学的で再現性のある数値として把握する』ことである。そのために我々は、a.純系の動物を使う（遺伝的素因による動物試験でのバラツキを極小化する）、b.正常な動物を使う（疾病を持つことによる動物試験のバラツキを極小化する）、c.一定の衛生環境で試験を行う（衛生環境の変動による動物試験のバラツキを極小化する）という条件の下で試験を行うという設定をした。この試験で、有効性と安全性がバラツキのない、再現性のある科

学的な数値として把握された『薬の候補者』について、臨床試験を行う。この段階で初めて『遺伝的素因』も『疾病を持った病的要因』も個別の衛生環境にある、即ち『衛生環境要因』もバラバラな患者について、『薬の候補者』が疾病の治療に対して『安全性が高く』しかも『有効性を持つ』か否かがテストされるのである。しかし、残念ながらそこから得られる情報は主として、『治療薬とプラセボとの比較試験』であり、『個々の患者』への作用、副作用についてはほとんど顧みられることはない。そして、市販後の追跡調査でも、個々の患者の『遺伝的素因』や『合併症の要因』や『患者が置かれていた衛生環境要因』を考慮した解析が行われることは極めて少ない。従って医薬品開発の段階で公表される『情報』は『個々の患者を指向したもの』にはなっていないのである。

従ってアメリカの臨床薬学発足の時に目指された『ペイシエントオリエンテッド・ファルマシー』と言う新しいパラダイムへの転換が出来ずに現在に至っているのである。

その様に考えてみると、『医薬品創製の考え方』と『医薬品を患者に適用する場での考え方』との乖離からくる『矛盾』が実際に現れる場合は『臨床の場』にしか有り得ないのである。

それでは『臨床薬学』は如何にあるべきであろうか。『臨床の場で初めて現れる矛盾（医薬品による望ましくない作用）を臨床の場で発見し、それを患者個々の遺伝的素因、疾病の要因、衛生環境による要因を考慮して、実験科学的に解決する学問を求めることにある』と考えられる。しかも、幸運なことに我々には既にその可能性が示されている。

即ち、現在抗マラリア剤・プリマキンで解糖系の酵素・グルコース 6-リン酸脱水素酵素を遺伝的に欠損する人種に引き起こされる溶血性貧血や、医薬品の肝臓での代謝に関わるP-450酵素（Cytochrome pigment 450）の遺伝的相同性によって引き起こされる種々の医薬品による副作用などで、我々にも知られるようになった『遺伝薬理学』、更に、様々な疾病を持つ患者が正常な患者で期待される治療効果を持てるか否かを検討する『病理学的薬理学』や、様々な衛生環境（食物、気温、騒音等）による薬物作用の変動を検討する『衛生学的薬理学』などの学問領域が出現し始めている。

臨床の場で患者に現れた『望ましくない作用』

を見つけ出し、これを先に上げた新しい学問等を活用して答えを出し、この『望ましくない作用』がこの次に起こらないように、あるいは、例え起こったとしても、対応の手段を講じることが出来るようにするのが臨床薬学の使命である。そのような学問こそが新しいパラダイムの下『臨床薬学』であり、このような役割を果たすことを可能にするのが、我々の目指す『臨床薬剤師』でなけ

ればならないと考えている。

私は現代の『患者指向の薬学を目指す臨床薬学』は、フラオウが述べた三つの革命に加えるべき第4の革命であると位置づけている。この臨床の薬学を担うのは、十分な薬学の基礎学と『遺伝薬理学』、『病理学的薬理学』、そして『衛生学的薬理学』等を研究の手段とし得るような教育を受けた薬剤師でなければならないと考えている。

研究室紹介

薬品製造化学研究室 小林 進

山川浩司先生の後任として平成7年10月、(財)相模中央化学研究所から移ってきました。平成8年4月からは相模で一緒にやっていた高尾賢一博士に助手として加わってもらい、研究室が始動しました。丁度、薬学部が講座制から研究室制へと切り替わった時期で、まさに新生薬学部と共にスタートしたといえます。

私はこれまでに何箇所も研究場所を変え、様々な観点からの研究を行ってきましたが、理科大に移るにあたって決心したことがあります。それは、「モノ創りのできる学生を育てる」ということです。いくつかの理由からですが、「モノ創りこそ真に創造的な研究」だと信じています。それ故、研究室の基本方針として「生物活性物質の合成」を掲げました。具体的には、(1) 興味ある生物活

性を有している天然化合物を標的分子として設定し、その合成研究を行う、(2) 化合物の全ての情報は構造式に含まれているので、構造式をもとに望ましい機能だけをもつ化合物を設計する、(3) 活性評価のグループとの共同研究を積極的に進めて分子設計にフィードバックする、(4) 究極的には天然物を超える人工分子を創り出す、ということを目指しています。天然が作りえない分子を自由に設計し、創り出すことができるのは有機合成だけがもつ特権であり、また社会的な使命の一つと考えています。

ゼロからのスタートで苦勞を共にし、高尾博士の努力のおかげで院生も育ち、蒔いた種からようやく芽が出てきたところです。高尾博士も本年3月に母校の慶大に戻り、4月から東レ基礎研から内呂拓実博士、アメリカのスクリップス研究所から帰国した細川誠二郎博士も加わりました。内呂博士は創薬化学を理科大に根付かせようという意気込みですし、細川博士も持ち前の馬力で学生を鼓舞しています。出てきた芽が大きな樹に育つよう、研究室全員で気持を新たにしているところです。



理大薬学部を去るにあたり

毒性学・微生物化学研究室 教授 上野 芳夫



東大医学部薬理学教室に在籍中、辰野高司教授にさそわれて鈴木静夫教授等と新設の薬学部に着任したのが1960年4月で、それ以来38年となり、大学の規定によりこの3月末で教授職を退職いたしました。教室の開設にご尽力いただいた辰野教授は主任研究員として理化学研究所に転出され、大学院設置にともない鈴木教授は衛生化学講座担当として異動されましたが、不幸にも急病で亡くなられ、昨年の講座制から研究室制への切り替えで石井賢二助教授は臨床薬学担当として異動されております。

この間、研究・教育にお骨折りを頂いた多くの助手・院生の諸兄姉並びに学部卒業生諸氏の努力が実り、現在までに40余名の博士並びに多数の修士取得者を輩出しております。水本・中川両君は北里大薬学部教授、田代君は本学生物工学科教授、小原君は千葉大薬学部助教授、北川君は九州大生体防御医学研の助教授、小俣君は久留米大医学部の、永田君は東大農学部講師として、それぞれの場で立派に活躍されており、ご同慶の至ります。昨年にはプリンストン大留学中の堀越君がハーバード大医学部に助教授として採用され、同じアメリカ留学中の卒業生4～5人並びに多数の国内研究機関在籍者の希望の星と輝いております。これらは、如何に当教室の卒業生、院生が優れた才能を有しているかを示す一端であり、それに多少とも力になる機会を得たことに感謝しております。

研究課題としては、前任の辰野教授が化学の立場から穀物汚染真菌由来の諸種有毒代謝産物を分離・同定された研究を引き継ぎ、それらを菌学、ト

キシコロジー、作用機構、発癌性、代謝活性化、環境汚染、及びヒトの健康障害の立場などから特性を明らかにすることに焦点をあわせ、さらに近年は水環境由来のラン藻類毒によるヒト肝癌発生も範疇に入れ、予防医学的見地から研究を進めて参りました。毒素産生微生物と有毒代謝産物の同定、生化学的作用機作、高感度免疫測定法の開発による汚染実態調査、ヒトの暴露量などを明らかにして来ました。それらの知見を基礎として、中期・長期の発癌動物試験を重ねてヒトに対する微生物毒素の危険度を予知し、それらの成果は400余編の原著、総説として国際雑誌などにまとめられております。国際純粋応用化学連合(IUPAC)などの国際シンポジウムで報告し、WHO始め関連国際研究機関で予防医学の進展に貢献するものとして高い評価を得ることができました。これらの成果は全て在籍諸兄姉の努力、並びに国立がんセンター、東大医学部薬理、国立感染症研究所、名古屋市立大学、名城大学、理化学研究所など関連研究機関の多大なご協力によるものであり、ここに厚くお礼を申し上げます。

長年にわたる研究生活を通じて推進力となりましたのは、化学、病理、発癌、菌学、疫学など関連分野の専門家との共同研究であり、当研究室の成果を評価して来日された10余名の海外研究者の参加であります。特にアジアや北欧諸国の研究者は、来日を機として当研究室が長年に渡りお世話してきましたマイコトキシン研究会を参考に、自国にマイコトキシン・天然毒学会を設立して活動を開始し、ヨーロッパ諸国ではEC間の食糧安全问题として、アメリカやカナダでは輸出農産物問題としてとりあげるなど、末広がりに研究が進展しており、それらの問題提起にささやかながら寄与したものと自負しております。

学内外の諸先輩から、薬学の研究は医薬品の開発にあり、毒素の研究はその本質とやや異なるのではないかとの指摘を受けたこともあります。しかし薬学の究極の目的はヒトの健康をいかに保持し、障害を排除するかにあると信じております。医薬品、食品添加物、農薬などヒトが作り出した

化合物はそれぞれ行政的な毒性試験で評価されてから使用されるのに比して、真菌やラン藻類由来の自然毒は、行政的な監視を受けるのはわずかで、大半は微量でかつ長期摂取され、我々の知らない内に腫瘍、免疫機能低下など諸種の疾病を引き起こす可能性があります。そこで、それらの作用機序や毒作用を明確にし、ヒトの危険性を予知し、対策を指針する研究は、我々の健康障害を自然毒から回避し、さらに農産物の生産者、消費者両者

に多大の利点をもたらすものであり、その経済効果は計り知れないものであると考えております。

本研究を指導して頂き、励まして下さいました辰野高司前教授に厚くお礼を申し上げるとともに、本薬学部の益々の発展を期待し、同窓会諸兄姉のますますの御健康をお祈りいたします。

なお、平成11年3月までは現状のまま研究室を運営しておりますので、是非お寄り下さい。



上野芳夫先生退官記念パーティー

平成10年3月14日(土曜日)快晴の空のもと、午前10時より薬学部10号館1011教室にて、満席のなか、上野芳夫教授は長年の輝かしく興味ひかれる御研究の成果を、最終講義として約1時間講演されました。講演終了後、万雷の拍手の中、学部学生より花束を受けられました。それにひき続き、薬学部のほとんどの教員・職員の参加のなか、薬学部主催の退官記念パーティーが行われ、名取信策先生(国立衛生研究所)、山崎幹夫先生(千葉大学薬学部教授)始め多くの方々からご祝辞をいただきました。

午後1時半からは、場所をホテルグランドパレスに移し、辰野高司先生(初代毒性学・微生物化学教室教授)、巻田泰治先生(元東京理科大学常務理事)の御祝辞、杉崎善治郎先生(基礎工応用生物・教授)の乾杯の音頭で退官記念パーティーが開宴しました。その後、卒業生和田紀子さんのバイオリンやピアノ演奏のなか、小原 侃先生(薬学部1期生、薬学部同窓会長)、中村洋先生(薬学部長)、榎本 真先生、池田佐喜男先生(東京理科大学・理事)、D.-H. Chan先生(Gyeongsang National大学)、遠藤 仁先生(帝京大学医学部教授)、藤木博太先生(埼玉県がんセンター所長)、鎌滝哲也先生(北海道大学薬学部教授)などから御祝辞があり、盛大かつ華々しい記念パーティーとなりました。パーティーには、諸先生方や上野先生に御指導いただいた卒業生併せて274名もの参加をいただきました。さらにひき続き、2次会、3次会と夜遅くまで、宴尽きることはなかったかのようです。なお写真は、上野先生御夫妻がホテルグランドパレスの会場から、退席されるところです。

誌面をお借りして、上野芳夫先生の輝かしい業績に敬意を表すと共に、その業績に参加させていただいたことを感謝いたします。また、最終講義、学部主催のパーティーを主催していただいた中村 洋薬学部長、薬学事務職員の方々及び諸先生方に、厚くお礼を申し上げます。

(上野芳夫先生退官記念パーティー世話人一同)

「退職から6カ月後の報告」

元東京理科大学薬学部 植物薬品化学研究室 教授 田中 信壽

本年3月に理科大薬学部を退職し、4月から「植物資源開発研究所」という個人会社を設立して仕事をしています。私にとっては3度目の転職であり、たぶん最後の転職になりますが、理科大には24年間も在職し、教授にまでなつて、なぜ転職なのか、とよく問われます。その理由などはこの場で書くつもりはありませんが、54歳という、充分に分別のつく年齢の男が熟慮した上での選択だったと思って下さい。「馬鹿だな」と思う人と、「快拳だ」と思う人がいて、どちらかというと前者のほうが多いのですが、その当否は3年後くら

いに判明するでしょう。この9月に行った健康診断の結果では、今までひっかかっていたいくつかの検査値がすべて良化しており、少なくとも健康面では転職が正解であったことを示しています。

「植物資源開発研究所」は退職金(あまりたくさんはもらえなかった)の半分を活動資金としてスタートしました。4月は退職と会社の設立に伴う諸手続きや挨拶まわり、研究生生活の残務整理などであわただしく過ぎました。5月と6月は、一昔前に使っていた風呂場を改造して簡単な実験のできる場所を作り、築35年の古アパートの1室を

改造して事務所を作りました。作業はすべて一人で行い、フロアリングからペンキ塗りまでこなし、最低限の出費で済ませることができました。この間、収入はありませんが、職人を雇って仕事をしてもらったかなりの出費を覚悟しなければならず、その分の稼ぎをしたことに相当します（自力で改装を考えている人にはこの経験をお教えできます）。

電話も引け、コピー機、コンピューターも中古品で揃え、いよいよ仕事が始まりました。「植物資源開発研究所」は植物に関連する商品を開発して販売する会社です。当初は健康食品を手がける予定でしたが、第1号の商品が秋になることを考えて、紅葉を対象とした押し葉の表装セット「リーフワークセット」と命名している）を開発することにしました。パンフレットの作成や広告の掲載などを考えると8月末をタイムリミットとして商品化しなければならず、かなりの急ぎの仕事になりました。この商品は、採集した葉や花を乾燥させるところから始まって、メークアップ、表装、額装と、いくつかのステップを経て作品が完成する手芸セットで、組み込む品目は多種類におよびます。その品物をどこから、いかに安く仕入れられるかをそれぞれについて検討しなければなりません。このために夏の暑さの中をずいぶん歩き回りました（こんなことは体力のあるうちでないとできません）。「リーフワークセット」の目玉は長期にわたって葉や花の色調を保持できる表装額を提供することです。これには私の専門知識が大いに役に立ったわけですが、いくつもの工夫を積み重ねて、やっと特許の申請ができるものを完成さ

せることができました。この間、土、日もなく働きましたが、何分にも所員は私一人なので（4月に女房を総務部長に命じ、ワープロで作った名刺を渡して事務所の掃除を分担させたのですが、給料が払われないので、最近は掃除も滞りがち）、はかがいせず、完全な商品が完成したのは9月末でした。急遽、パンフレットを作り、雑誌「いきいき」に広告の掲載を依頼し、10月10日より発売開始となっています。「リーフワークセット」は植物の持つ美しさをそのまま作品にすることができ、その色調を長期間保持することができる手芸セットです。今年は是非、紅葉を素材として楽しんでみてください（問合せ、資料請求は03-3765-0189まで）。しっかりと宣伝もさせてもらっていますが、少しは商売人らしくなった証拠でしょうか。

ところで、この商品を作るにあたって、特許の件では私の杏林製薬時代の友人に、パンフレットや広告の件では理科大薬学部卒業生の長谷川久美子さん（ラ・プラス代表）にお世話になりました。やはり何か始める時は人脈が最大の財産という感じがします。これから多くの方にお世話になって仕事をしていくことになるでしょう。その意味で、理科大薬学部の同窓会は人材の宝庫だと思うのですが、必ずしも組織化がうまくいっていないようなのは残念です。特に若い世代の人達の加入が少ないのはなぜでしょうか。同窓会の宿命として、どうしても長老達のお達者クラブになりがちなのですが、やはり、実利的な内容がないと組織の存続は難しいということでしょうか。今後は私も大いに利用させてもらえるような、そんな組織に発展されることを期待しています。



田中信壽教授 ご退職記念懇親会開かれる

植物薬品化学研究室の田中信壽教授が、「植物資源開発研究所」を設立されるため、東京理科大学薬学部を平成10年3月に退職された。3月14日に東京理科大学田中先生の最終講義が行われるため、この日に合わせてお世話になった卒業生が中心になり、午後2時より千代田区の砂防会館グリンサポーにてご退職記念懇親会が催された。

元教授の村上孝夫先生や神戸学院大学の佐武紀子先生、田中研究室を引き継いだ袴塚高志先生をはじめ、田中先生が東京理科大学に就任されてからお世話になった卒業生を中心に、98名が出席した。会場は、予想以上の出席者でやや狭かったものの、田中先生を囲んでそれぞれの思い出話に花が咲き、和やかな雰囲気であった。

一段落したところで、隣室でスライド映写会となり、研究室の夏合宿でのさまざまな珍場面やいろいろな方々の若かりしころ（？）が映し出され、爆笑の連続であった。

最後に、田中先生が設立される「植物資源開発研究所」のユニークな紹介があり、無事に閉会となった。

田中先生の今後の御活躍と御健康を、研究室卒業生一同祈念いたしております。

（15期 和田 浩志）

98年度「実践社会薬学」の日程と講演者

①『オリエンテーション』

『行政の立場から』

10月17日(土)

- * 石井 甲一(11期) (厚生省)
- 桑原 亮吉(5期) (多摩立川保健所)
- 大滝由美子(10期) (ツムラ)
- 久保田昭恵(11期) (東海大学病院)
- 小暮 渉(11期) (廣川書店)
- 上村 直樹(23期) (富士見台調剤薬局)

②『医薬品企業の中の薬剤師』

10月24日(土), 10月31日(土)

- * 大滝由美子(10期) (ツムラ)
- 富田 紀子(3期) (東邦薬品)
- 島谷 克義(4期) (ファイザー製薬)
- 寺山 博行(7期) (スミスクライン・ピーチャム製薬)
- 長野 明(9期) (第一製薬)
- 安達 順一(11期) (ファルマシア・アップジョン)
- 安田 栄一(14期) (スミスクライン・ピーチャム製薬)
- 上田ゆみ子(31期) (日本ワイス)

③『医療の現場から』

11月7日(土), 11月14日(土)

- * 久保田昭恵(11期) (東海大学病院)
- 塩山 秀寿(5期) (川崎市立川崎病院)
- 柴久喜和枝(11期) (柴久喜整形外科)
- 富秋 道子(11期) (調津田総合病院)
- 栗城 淳子(12期) (伊藤病院)
- 中里 章(14期) (東京災害医療センター)
- 小茂田 昌代(15期) (柏光陽病院)
- 小沢 和雄(18期) (昭和大学病院)
- 下舞奈津江(31期) (済生会平塚病院)

④『地域薬局の現場から』

11月28日(土), 12月5日(土)

- * 中村 洋司(3期) (田無調剤薬局)
- 畑中 典子(14期) (かくの木薬局)
- 上村 直樹(23期) (富士見台調剤薬局)
- 伊集院 一成(25期) (ホーム・ケア・ファーマシー)

* : 各グループのリーダー (まとめ役)



1997年度会計報告

東京理科大学薬学部同窓会
1997年4月1日～1998年3月31日

収入の部		支出の部	
内訳	金額	内訳	金額
同窓会費	5,950,000	人件費	720,120
寄付	140,445	電話代	36,718
名簿売り上げ	10,000	会議費	28,111
講演会参加費	11,000	会誌印刷費	269,325
利息	69,113	会誌発行経費	332,482
後納郵便担保金返却	54,167	会誌発送費	435,871
		諸案内状印刷発送費	414,429
		通信費	216,713
		事務用品代	3,548
		振り込み手数料	2,440
		ソフト代	21,840
		コピー代	36,000
		謝金	50,000
		雑費	55,694
合計	6,234,725	合計	2,623,291

前年度繰越金 24,171,027
名簿売り上げ(計上漏れ) 753,600
今年度残高 3,611,434
本年度繰越金 28,536,061

内訳
定期預金(三和銀行) 10,000,000
郵便定額預金 12,614,264
普通預貯金 5,921,797
28,536,061

以上の通り会計報告いたします。

1998年4月22日

会計

池北 雅彦
村松 延弘

監査報告

会計報告の各事項を調査し、その収支ともに正確であることを認めます。

1998年4月22日

会計監査

安達 順一
岡宮 智子

97年卒業生進路

薬学科

イトーヨーカ堂
クリエイトエス・ディー
シュウウエム化粧品
セイジョー
マツモトキヨシ
環境管理センター
アール・スリー 阿佐谷ファーマシー
エーザイ
キョーリン製薬

クラフト
ジーエルサイエンス
スミスクライン・ピーチャム製薬
ダイナボット
共立商事
協和発酵工業
埼玉県(県職員)
三共
山之内製薬
信州ジャスコ

神奈川県川崎市職員
大塚製薬
第一製薬
蝶理
長瀬産業
東京医科歯科大学医学部附属病院研修生
東京大学医学部附属病院研修生
東京都(都職員)
日本たばこ産業
日本イーライリリー

日本グラクソ
日本ベーリンガーインゲルハイム
日本医科大学医学部附属病院研修生
全薬工業
日本大学医学部附属病院研修生
日本調剤
武田薬品工業
明治製菓
鈴鹿富士ゼロックス
和光堂
萬有製菓
進 学
東京理科大学大学院
横浜市立大学大学院
金沢大学大学院
千葉大学大学院
東北大学大学院
奈良先端科学技術大学院大学

製薬学科

サンドラッグ
サンロード
シノテスト
レディ薬局
葵プロモーション
電通テック
磐城済社会松村総合病院
青森県薬剤師会会営八戸第一調剤薬局
かくの木薬局
エーザイ
キョーリン製薬
クラフト
ノバルティスファーマ
ヘキスト・マリオン・ルセル
ポーラ化成工業
ライオン
伊藤ハム

久光製薬
救心製薬
香栄興業
三共
参天製薬
寿製薬
小野薬品工業
昭和大学病院
鐘紡
赤城乳業
大塚製薬
中外製薬
東京医科歯科大学疾患遺伝子センター
東京田辺製薬
東菱薬品工業
藤沢薬品工業
日本グラクソ
日本ベーリンガーインゲルハイム
日本メジフィジックス
日本化薬
富山化学工業
富士レビオ
防衛医科大学（技官）
明治製菓
湧永製薬
進 学
東京理科大学大学院
京都大学大学院
九州大学大学院
慶應義塾大学大学院
大阪大学大学院
筑波大学大学院
東京大学大学院
北海道大学大学院

薬学研究科 修士課程
タニタ

ニッショー
資生堂
日本抗体研究所
クインタイルズ・アジア・インク
トーアエイヨー
ノバルティスファーマ
ファイザー製薬
協和発酵工業
虎ノ門病院
三共
三菱化学
参天製薬
山之内製薬
住友重機械工業
松下電器産業
千葉県（県職員）
大正製薬
大塚製薬
第一製薬
中外製薬
帝人
田辺製薬
東京田辺製薬
藤沢薬品工業
日本グラクソ
日本シェーリング
武田薬品工業
明治製菓
明治乳業
和光純薬工業
萬有製菓
進 学
京都大学大学院博士後期課程
東京大学大学院博士後期課程

薬学研究科 博士後期課程
癌研究会癌研究所

大学の現状

在校生について

学部		1年	2年	3年	4年	小計
薬学科	男子	58	31	39	26	154
	女子	80	52	59	54	245
	小計	138	83	98	80	399
製薬科	男子	46	41	43	44	174
	女子	60	47	62	50	219
	小計	106	88	105	94	393
合計		244	171	203	174	792

大学院修士		1年	2年	小計
	男子	32	39	71
	女子	17	6	23
	小計	49	45	94

大学院博士		1年	2年	3年	小計
	男子	3	2	2	7
	女子	1	0	0	1
	小計	4	2	2	8

同窓幹事

会長	小原 侃 (1)	湯田 康勝 (5)	上村 直樹 (23)
副会長	黒崎 浩巳 (1)	小暮 渉 (11)	伊集院一成 (25)
	山口 稽子 (2)	菅原 伸治 (15)	名簿 (コンピュータ担当)
	中村 洋司 (3)	渡辺 宏二 (18)	山口 稽子 (2)
	池北 雅彦 (12)	中村 洋司 (3)	石坂 隆史 (大学院)
監査	安達 順一 (11)	石井 賢二 (7)	山口 稽子 (2)
	岡宮 智子 (11)	寺山 博行 (7)	事務局
会計	池北 雅彦 (12)	石井 甲一 (11)	同窓会総会 (講演会)
	村松 延弘 (9)	黒崎 浩巳 (1)	5期幹事
会報・記録	池北 雅彦 (12)	宇留野 強 (4)	(湯田 康勝)
	武尾 勝司 (9)	奥村 成太 (8)	

同窓会役員名簿

同窓会名簿

幹事住所録 (1998年12月現在)

期 氏名 電話

1	小原 侃	03-3364-4858	湯田 康勝	048-864-3982	石井 甲一	03-5483-8089	和田 和裕	0425-81-2305
	黒崎 浩巳	0475-24-9270	6 伊藤 孝雄	0425-74-2035	小暮 渉	0463-31-0813	23 上村 直樹	042-575-6836
	光井 英基	0764-63-5717	野村 恵美	047-354-0269	岡宮 智子	03-3336-6060	小安 純子	0427-99-0414
	山口堅志郎	042-374-2102	大谷 和弘	0425-41-6019	富秋 英志	045-982-0324	24	
2	日比野 貢	0474-84-8057	漆畑 和子	0424-23-4413	向井 呈一	0471-43-1029	25 伊集院一成	0424-69-3050
	山口 稽子	03-3680-0395	竹上 昭	042-378-9722	12 飯塚 忍	043-287-5152	26	
3	金 康子	03-3391-8670	藤井 幸子	03-3382-5723	池北 雅彦	03-3418-8586	27 工藤 菜美	044-852-9580
	中村 洋司	0422-44-2744	渡辺 久子	0489-64-8800	13 濱野 朋子	03-3904-8578	前田 真	03-5762-1232
4	池田 幸雄	0438-41-6587	7 石井 賢二	0424-74-9145	波田野佐和子	0474-83-6592	28	
	宇留野 強	0297-52-0421	寺山 博行	048-685-9383	14 田村 哲彦	047-324-3737	29 大瀧 充	03-5351-5526
	降矢美智子	0462-56-1972	飯田 典子	03-3334-7857	15 菅原 伸治	045-301-3216	神谷 貞浩	03-3388-6705
	島谷 克義	0424-64-2555	8 松岡 隆	0297-72-9621	中川 理恵	0471-83-4130	30 大瀧 希美	03-5351-5526
5	角田 公恵	03-3300-1834	奥村 成太	03-3268-0109	16		若林 政義	03-3949-5516
	島田 博子	0489-86-2969	9 武尾 勝司	0492-71-7440	17		31	
	山川 洋志	03-3427-6567	林 一夫	027-220-5053	18 渡辺 宏二	042-371-3119	32	
			村松 延弘	0471-24-0724	19		33	
			吉野 晃司	045-381-4543	20		大学院	
			10		21		石坂 隆史	03-3716-8224
			11 安達 順一	045-623-5565	22 小川 政彦	0492-48-7259		

宛名シールをご確認下さい。

同窓会よりの封書が届きましたら、宛名シールで自分の会費納入状況をご確認下さい。

正……正会員 (入会金を納めた方)

∞……終身会員 (入会金と終身会費を納めた方)

数字 (例98-3) …… 年 会 員 (例 の 場 合 1998年
3月までの年会費を納めている方)

未……未入会の方

未入会の方はこの機会に是非ご入会下さい。また1998年度以降の年会費が未納の方 (98-3以前のマークのある方) は年会費5年分 (5,000円) を納入下さい。

年会費 25,000円

(入会金 20,000円 + 年会費 5年分 5,000円)

終身会員 50,000円 (入会金を含む)

但し、会員の一親等親族および会員の配偶者の会費はすべて1/2とする。

(1997年7月19日会則改訂)

訃報

楠 葉 敏 雄 (21期)

平成10年4月23日 死亡

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

薬学部同窓生が講師として在校生に講義をする「実践社会薬学」も好評の中、3回目が無事終了しました。このまま講義として定着するようになり、何年後かに当時の学生が講義をするという時が迎えられれば最高です。

さて、長引く不況の影響からか夏目漱石が今静かなブームとなっています。新聞によれば社会、経済的な変動期になると漱石のブームが起き、今が戦後3度目のブームだそうです。漱石といえば神楽坂に縁のある作家で、「坊っちゃん」には、神楽坂の毘沙門の縁日の思い出が描かれていますし、「それから」にも神楽坂が登場します。皆さんが卒業された時と比べ、神楽坂の街並みもだいぶ様変わりしました。たまには、仕事の手をやすめ、漱石の本を片手に、学生時代の思い出をたずねて神楽坂の散策などはいかがでしょう。

第2回 歩こう会

神楽坂散策のお誘い

創立から116年、神楽坂で91年を迎えた東京理科大学。薬学部も37年を迎えました。

古くは夏目漱石、泉鏡花、北原白秋などが愛した町、神楽坂。時代が変わっても、古き良き伝統の残っている町です。

懐かしさを訪ねて友人と、または御家族でのんびりと散策をしてみませんか。

日時：3月14日(日) 10:00

集合場所：セントラルプラザ広場

JR飯田橋駅西口右折

※当日、神楽坂案内図と散策モデルコースをお渡しいたします。

雨天中止。

第1回 歩こう会の報告

薬学部同窓会も10年目を迎えることになり、同窓会をより身近なものとして考えてもらおうと、歩こう会（神楽坂散策のお誘い）を企画しました。学生時代を神楽坂で過ごしたにもかかわらず、この街のことをほとんど知らなかったのではないかと疑問が始まりでした。神楽坂は漱石が幼い頃から通っていた街であり、北原白秋、石川啄木、泉鏡花などとも縁が深い街です。今でも所々に伝統的な空間が残されています。そこで、できるだけ昔の町並みの残るところを通る散歩のモデルコースを考えてみました。ところが、当日の3/15はせっかく作った歩こう会の看板も飛ばされるような暴風雨の天気となってしまいました。しかし、このような悪天候にもかかわらず、数名の方の参加がありました。同窓会会報を見て、懐かしく思い、お互いに連絡を取り合って参加して下さったそうです。初めての企画でしたが、昔の友人達と集まる一つのきっかけを提供できたことで、小さな満足感が得られた一日でもありました。

〈神楽坂てくてく散策マップ〉

——モデルコース約2時間——

(JR飯田橋駅-茗荷公園-茗荷八幡-毘沙門天-光熙寺-栗土八幡-JR飯田橋駅)

神楽坂通りには、昔ながらの足袋屋、下駄屋、煎餅屋、人形屋などがあります。これらのなつかしい店をのぞきながら、ゆっくり散歩されることをおすすめします。

